

# 赤土へくる子供たち

小川未明

青空文庫



釣りの道具を、しらべようとして、信一は、物置小舎の中へ入  
 っ、あちらこちら、かきまわしているうちに、あきかんの  
 紙につつんだものが、入っているのを見つけ出しました。

「なんだろうか。」

頭を、かしげながら、ほこりに、よごれた紙を、あけてみると、  
 べいごまが、六つばかり入っていました。信一は、急になつかし  
 いものを、見いだしたようにしばらくそれに見入っていました。  
 そのはずです。一昨年おとしの春はるあたりまで、べいごまが、はやって、

これを持って原っぱへ、いったものです。それが、べいのやりとりをするのは、よくないというので、お父さんから、先生からも、とめられて、ついみんなが、やめてしまったが、ただ記念にしようと思って、これだけすてずに、紙に包んで、しまっておいたことを、思い出しました。

「やはり、こまはおもしろいなあ。」

お天気はいいし、子供たちのあそんでいる声が、きこえるし、もう信一は、じつとして、家にいることが、できなかつたのです。べいごまを、ふところへ入れると、赤土の原っぱをさして、出かけていきました。

原っぱには、武ちゃんや、善ちゃんや、勇ちゃんたちが、あそ

んでいました。

信一は、ふところから、べいを取り出して、土の上で、まわしてみました。これを見つけると、善吉が、遠くからかけてきました。

「信ちゃん、なにしてんだい。」と、さげびました。

「なんでもない、ただ、まわしてみただよ。」と信一は、べいをひろい上げて、また紙の中へ、入れました。

「君、べいごま？」

「うん、そうだよ。」

「いくつ、持っているの？」

「六つしかない。」

善吉ぜんきちは、あんなに、たくさん持もっていたのに、どこへやったのかと、いわぬばかりの顔かおつきをして、信一しんいちを見みました。

「あんなにあつたのを、どうしたんだい。」

「みんな川かわへすててしまった。」

「おいしいことをしたね。」

「だって、お父とうさんが、すてろといったから。」

善吉ぜんきちは、自分じぶんも同じおなじようなめに、あつたことを、思おもい出だして  
いました。

「君きみは？」と、こんどは、信一しんいちがたずねました。

「ぼくは、いま十個こも持っているよ。あとは、ごみ箱ばこへ、すててしまつたのさ。」

善吉ぜんきちが、こう答こたえると、信一しんいちは、目をまるくして、

「いまなら、くず屋やさんにやると、いいんだね。ごみ箱ぼこの中なかへ、すてたりして、おいしいなあ。」と、いいました。

「ぼくも、十個こかくしておいたのを、持もつてこようか。」と、善吉ぜんきちは、いいました。

「あ、持もつておいでよ。」

このとき、あちらから、勇二ゆうじと武夫たけおが、

「なにしているの。」と、口々くちぐちに、わめきながら、やはり、かけてきました。

「べいごま。」

「ぼくも持もつているよ。」

「いくつ？」

「ぼくは、十五個こばかり。」と、武夫たけおが、いいました。

「おお、たくさんあるんだな。」と、みんなが、感心かんしんしました。

「勇ゆうちゃんは、持もっていないの。」

「僕ぼくは、十個こばかり。」と、勇二ゆうじが答こたえました。

「なんだ、みんな、持もっているんだな。じゃ、ここへ持もってきて、まわしっこしない？」と、善吉ぜんきちがいいました。

「しようよ。ただやるだけなら、いいんだろう。やったり、とつたりして、かけなけりやね。」と、勇二ゆうじが、いいました。

「ほんとうは、それでは、おもしろくないんだがな。」と、武夫たけおが、いいました。



「だめ、見つかったら、しかられるから。」

「さあ、早くみんな、家へいつて、持つておいでよ。」と、信一が、いいました。

「オーライ。」と、子供たちは、元氣よく、いっさんに、原っぱから、かけ出して、きえてしまいました。

まつさきかけて、つつこめば

なんともろいぞ、敵の陣

馬よいななけ、かちどきだ

信一は、うたいながら、しきりに、べいをまわして、しばらく、しなかつた、手ならしをしていました。

すると、このとき、ぴかりと、自分の顔を、あかるくてらした

ものがあります。とんぼでも飛んできて、さわったのでないかと、顔をなでてみました。そして、べいのまわるのを見てみると、また、ぴかりとしました。

「なんだろう?」

信一は、頭が上げて、原っぱを見まわしました。はじめ、だれもいないと、思ったのに、あちらに、材木のつんである上で、女の子が、あそんでいました。

よく見ると、かね子さんと、光子ちゃんらしいのです。そして、ぴかりとしたのは、だれか、コンパクトに、ついていっているかがみで、日を見てかえして、自分に、いたずらを、したのです。

信一が、じっと見ていると、二人は、くすくす、笑っています。

た。

「知<sup>し</sup>っているよ。」と、信<sup>しん</sup>一が、その方<sup>ほう</sup>へ走<sup>はし</sup>っていききました。

「私<sup>わたし</sup>たち、なんにもしないわ、おままごととしていたのよ。」と、かね子<sup>こ</sup>さんがいいました。

「コンパクトのかがみで、やったんだい。」

「ほほほ。」

「信<sup>しん</sup>ちゃん、そこにいるの。」と、まつ先<sup>さき</sup>にかけてきたのは、善<sup>ぜん</sup>吉<sup>きち</sup>でありました。つづいて、武<sup>たけ</sup>夫<sup>お</sup>に、勇<sup>ゆう</sup>二<sup>じ</sup>が、手<sup>て</sup>にこまをにぎってかけてきました。

「ああ、ござが、ないなあ。」

「だれか、だいと、ござを、持<sup>も</sup>つてくると、いいんだね。」

「だいは、いらなないけれど、ごぎがなくては、できないよ。」

こまは土の上では、よくまわらぬからです。勇二は、足に力を

いれて、赤土の上をトン、トン、と、ふんでいました。かたく

して、そこで、こまをまわそうというのです。

「土の上では、だめだよ、だれか、家にごぎを持っていない。」

と、信一が、いいました。そこへ、また、あちらから一人の少

年ねんがかけてきました。

「小山が、きた。」

小山は、かね子さんの兄さんです。

「べいをするのかい。」と、小山が、ききました。

「ごぎがなくて、こまって、いるんだよ。だれか、ごぎを、さが

してこないかな。」と、勇二が、いいました。

「私、家へいって、持ってきてあげるわ。」と、かね子さんが、いいました。

「ほか、家にござなんか、ないじゃないか。」と、小山は、かね子さんをにらみました。

二

十日ばかり前のことでした。新緑がすがすがしいの木の  
下で、たたみやが、しごとをしているのを、かね子さんは、立  
って見ていました。いつか赤いインキをこぼして、お父さんにし

かられてすぐインキけしでふいたけれど、どうしても、そのあとがとれなかつた茶の間のたたみも、新しい青い草のかおりのする表にかえられました。

もうこれから、毎日あのよごれた、たたみを見なくてすむのであります。そんなことを思つて見ていると、おもしろいように、ほうちようの刃が入ります。するするとござが切れていきます。そのあとを太い針が、すいすいとぬつて、じようぶな糸を通していきます。半畳のところへくると、半分だけござが残りました。かね子さんは内へかけこんで、「お母さん、新しい半分のござが残ったの、どうするの？」と、ききました。

「しまつておけば、にゆうよう入用のことがありませんよ。」

「ねえお母さん、かあ私わたしにちようだいよ。」

「なんにするんですか。」

「わたし私、おままごとのとき、しくんですの。」

「そんなら、おお大きいのがいいでしょう。」

「わたし私、ふる古いのはいや、あた新しいのがいいの。」

「あげてもいいですよ。」

かね子こさんは、よろこ喜んで、はんぶん半分のごぎをもらつて、もの物置なかの中

へしまつておきました。

いま善ぜんちゃんや、勇ゆうちゃんや、信しんちゃんたちが、べいごまをす

るのに、ごぎがなくなつてこまっているのを見みて、しまつておい

たごぎを、思い出したのです。それでかしてあげましょうかと、  
いったのでした。

「ぼか。」と、兄さんにしかられて、かね子さんは顔を赤くしました。けれど、自分のものを、かしてやって、しかられるわけはないので、

「物置にあるわよ。」と、かね子さんはいいました。

「あれは、ぼくんだい。」と、小山は、妹をにらみました。

「いいえ、あれは、私のよ。」

「ぼくが、手工をするのに、お母さんからもらったんだい。」

友だちは、二人の方を見ていましたが、

「小山くん、かしてね。」と、信一が、いいました。けれど、小



山はだまつていました。

「ねえ、辰雄くん、いいだろう。」と、善吉がいました。

「ぼく、べいを持っていないから、つまんないもの。」と、小山が答えました。

「ごぎをかしてくれば、一つあげるよ。」と、勇二が、いいました。小山は、急に、たのしそうな顔色になりました。

「ほんとうかい。」と、小山は、かけだしました。

「だれが、うそをいうもんかね。」と、武夫と勇二は、顔を見あつて、にっこり笑いました。

小山は、ごぎをかかえて、もどつてきました。このとき、かね子さんは、

「光子さん、あつちへいって、じゆずだまを取りましようよ。」  
と、いいました。草むらの中には、つゆくさがむらさきの花を咲  
かせていました。へびいちごの赤い実が、じゆくしてました。  
あちらでは男の子たちが、べいにむちゆうになつています。

「ござが新しいから、気持ちがいいね。」

「勇ちゃんの角は強いなあ、辰ちゃんの一つしかないべいがすつ  
とんでしまった。」と、善ちゃんが笑いました。

小山は、しよげてしまいました。せつかく、勇ちゃんがくれた  
のに、また勇ちゃんに取られてしまったからです。

「ぼくが、一つあげよう。」と、こんどは、武夫が一つこまを小  
山にやりました。

「やりとりしつこなしなんだろう。」

「うそつこでは、つまんないや。」

「わかると、先生せんせいにしかられるよ。」

「ああ、いちばんあとで、みんなかえそうや。」

みんなで、そんなことをいつていると、

「ぼく、もうかえろう。」と、小山こやまがいました。

「かえるの？ もっとあそんでおいでよ。」

「勉強べんきょうしないと、お母かあさんにしかられるもの。」

小山こやまは、しいてあるごぎを取りとかりました。

「辰たつちゃん、かしておきよ。すんだら持もつていくから。」と、武た

夫けおがいました。

「よごすと、手工しゅこうのとき、こまるもの。」

「そんな、いじわるをいうもんでないよ。」

「ほんとうだい。ごぎがなければ、べいができないじやないか。」  
と、勇二ゆうじが、おこり出だしました。

小山こやまは、こういわれると、ごぎにかけた手てをひっこめました。

「辰たつちゃん、べいを一つあげよう、これは、ほんとうに、君きみにあげるのだよ。」と、善吉ぜんきちが、こまをやつて、小山こやまのきげんを、なおそうとしました。

「さあ、みんなでやろう。辰たつちゃん、もうすこしあそんでいたつて、いいだろう。」

こういいながら、信一しんいちは、ブーンとうなりをたて、こまをござ

の上へ投げ入れました。こまは元気よくまわりました。そこへ善吉も、勇二も、武夫もいつしよにこまを投げ入れました。

こまは、たがいにふれ合つて、ぱつぱつと火花を散らしています。ややおくれて、辰雄ももらつたこまを投げ入れました。辰雄のこまもすごいいきおいを出してまわっていたが、けつきよく武夫のこまが、どれもこれも、はじきとばして天下を取りました。また、小山は、こまを一つも持たなくなつたのです。そのさびしそうなようすを見て、信一は、

「辰ちゃんに、一つあげよう。」と、いつて、ひらたい、ぴかぴか光つたのをやりました。

「おお、そのべたをやるの。」と、勇二が、目をまるくしました。

「かしてあげたのさ。」と、信一しんは答こたえた。そうきくと、なんと思おもったのか、

「いらぬい。」と、いつて、辰夫たつおは、そのこまを信一しんの手に返かえしました。

「どうして。」と、信一しんは小山こやまの顔かおをふしぎそうにのぞきこみました。

「ぼく、もうかえるんだよ。」

「ほんとうに、これ、君きみにあげるよ。」

「ぼく、もうかえるんだ。」

小山こやまは、こういつて、また、ごぎを取とりにかかりました。

このとき、じつと小山こやまのすることを見みていた善吉ぜんきちが、

「いじわるのけちゃんぼめ。」と、いつて、小山のごぎを、自分の  
はいていたくつで、ふみにじりました。

「何するんだ。」と、小山は、善吉を、おしたおそうとしまし  
た。ひよろひよろとなった善吉は、

「なにを。」と、小山に、とびついていきました。

## 三

「おい、けんかは、およしよ。」と、信一が、いいました。

「いじわるをするから、けんかになるんだ。」と、みんなが小山  
の顔を見ました。

「ぼくのごぎだもの、かってじやないか。」と、小山は、顔を赤くしながらいいました。

「そのかわり、べいをやったろう。」

「こんなもの、ほしくはないよ。」と、小山は、一つの手に持つていたべいを、なげすてました。

「急に勉強するなんて、いわなくていいね。」と、武ちゃん  
が、いいました。

「勉強のことなんかいうのは、てんとり虫のいうことだ。」

「いらんおせわだよ、だれかみたいに、ランドセルなんか、もらわないからいいよ。」

「なんだと。」



武ちゃんたけは、はずかしめられたので、小山こやまのごぎをめりめりと引きひさきました。

「やあい、いいきみだ。」と、勇ゆうちゃんが、手てをたたきました。小山こやまは、しくしくと泣ないて、かえりかけました。

「いいか、おぼえておれ。」と、小山こやまは、泣なきながら、こちらをふりかえりました。

「いいとも、あそんでなんかやらないから。」と、善ぜんちゃんが、答こたえました。

「石いしをなげてやろうか。」と、武たけちゃんが、足あしもとの石いしをひろいました。

「およしよ。」と、信しんちゃんがとめました。

兄あにのいじめられたのを知しると、かね子こさんが走はしつてきました。

「なんで、みんなして兄にいさんをいじめなの。」

「なまいきだからさ。」

「かしたごぎをかえしておくれ。」

「そこにあるの持もつておゆきよ。」

「こんなやぶれたのでないのをかえしてよ。あす学がっこう校へいったら、先せんせい生せいにいうから。」

「いくらでもおいしいよ。」と、武たけちゃんがおこつて、たたきにかかると、かね子こさんは、逃にげていきました。

「けんかなんかして、つまらないなあ。」と、善ぜんちゃんが、ポケツトからボールをだして、空そらへ向むかって投なげ上あげました。

「ボールをしようか。」

そんなことをいつているところへ、鳥打帽とりうちぼうをかぶつて、足あしにゲートルをまいた男おとこが、ステツキについて、原つぱをみんなのいほうる方あるへ、歩いてきました。

「あつ、いつかきた紙かみしばいのおじさんじゃあない？」

「そうだ、おじさんだ。」

「おじさあん。」と、みんなが、さげびました。

「おうい。」と、おじさんが、笑わらいました。

「どうしたの、おじさん、しばらくこなかつたね。」

「ああ、商しょうばい売ばいがえをして、このごろは、お話はなしをして学がっ校こうをまわっているのだ。」と、おじさんは草くさのはえたところへ、こし

をおろしました。

「なにか、おもしろいお話はないか。」と、おじさんが、みんなにききました。

「おもしろい話<sup>はなし</sup>って、どんな話<sup>はなし</sup>?」と、信<sup>しん</sup>ちゃんが、いいました。  
「なんでも、君<sup>きみ</sup>たちが見た話<sup>はなし</sup>さ。」

「おじさん、してあげようか。」と、善<sup>ぜん</sup>ちゃんが、いいました。  
友<sup>とも</sup>だちが、みんな善<sup>ぜん</sup>ちゃんの顔<sup>かお</sup>を見<sup>み</sup>ました。

「きのう、ぼくプールへいったんだよ。そして、泳<sup>およ</sup>いでいると、どこかの子<sup>こ</sup>が、小<sup>ちい</sup>さな弟<sup>おとうと</sup>と妹<sup>おとうと</sup>をつれてきたのさ。そして、うきぶくろにつかまって、泳<sup>およ</sup>ぎなさいといったのだよ。けれど、その小<sup>ちい</sup>さな弟<sup>おとうと</sup>も妹<sup>おとうと</sup>も水<sup>みず</sup>にはいるのが、はじめてとみえて、おそろしがっ

てはいらないのだ。

しかたがなく兄さんひとりプールへ入って泳いだのさ。そうすると、小さな弟と妹が、おせんべいをたべながら、兄さんの泳いでいく方へついて、プールの岸をぐるぐるまわっているのさ。ぼく、これを見て、おかしくてしようがなかった。だって、おせんべいをたべながらついて走るんだぜ。」

「は、は、は。」と、おじさんが、笑いました。おじさんが、おかしそうに笑ったので、みんなが、いっしよに笑いました。

「なるほどな。」と、おじさんがいいました。

「さあ、こんど、おじさんの番だ。」

「おれは、こないだ、北の方へ旅行をしてきたが、いなかの子

は、みんな非常時ひじょうじなのでよくはたらいしているぞ。学校がっこうからか  
えると、山やまへいつて、たき木きぎをせおつてくるものや、畠はたけへ出でてく  
わつみの手てだすけをするものや、また、くわの葉はのはいったぎる  
をかかえたり、せおつたりして、家いえへはこんだりする。そうかと  
おもおもこもりこもり思うと子守こもりをしながら本ほんを讀よんでいるものもいる。町まちの子供こどもたち  
のように、あそんでばかりいないよ。」

「ひどいな、おじさん、ぼくたちだつて親おやのおてつだいをしてい  
るものが、いるんだぜ。」

「そうか、それは、感かん心しんなこつた。」

「まだ、おもしろい話はなしはないの。」

「それから樺からふと太ふとまでいったよ。」

「樺太<sup>からふと</sup>? たいへん寒いところまでいったんだね。」と、子供<sup>こども</sup>たちは、あの北<sup>きた</sup>のはしにつき出<sup>で</sup>て、青い海<sup>あおい</sup>の色<sup>いろ</sup>にとりまかれた、ほそ長い島<sup>ながしま</sup>を思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>しました。

「ツンドラ地帯<sup>ちたい</sup>つて、沼地<sup>ぬまち</sup>みたいなの、こけばかりはえているところがある。そこへ火<sup>ひ</sup>がつくと、なかなかきえない。何年<sup>なんねん</sup>ということなく、燐<sup>りん</sup>の火<sup>ひ</sup>のようなのが下<sup>した</sup>からもえ上がる。

また、樺太<sup>からふと</sup>には、人間<sup>にんげん</sup>の手<sup>て</sup>のはいらない大きな森<sup>もり</sup>や林<sup>はやし</sup>がある。それに火<sup>ひ</sup>がつくと、それこそたいへんだ。どこまでもえるか、わからないからな。そんなとき、どうするかというに、火<sup>ひ</sup>のもえていく何十メートル<sup>なんじゅうメートル</sup>か先の林<sup>さきはやし</sup>を切りはらつて、あきちをつくるのだ。そして、火事<sup>かじ</sup>のある森<sup>もり</sup>の片方<sup>かたほう</sup>のはしへ火<sup>ひ</sup>をつけるのだ。す

ると、あちらからもえてくる火と、こちらからもえていく火とだ  
 んだんちか近づいて、どこかで出であうだろう。そのときは、どうだと  
 思おもう。ドーンという大おおきな音おとがして、火ひのはしらが空そらへ立たつのだ。  
 そして、それで火ひがきえてしまうのだ。なぜって、両りようほう方ほうから  
 の火ひで、空くうき気があつくなつて、まなかん中の空くうき気がなくなるからだ。」  
 「ほんとにおもしろい話はなしだな。おじさんは、その火かじ事じを見たの？」  
 「いや、きいた話はなしさ。おじさんが見たのは、ある村むらで、馬うまが出しゅつ  
 征せいするので、駅えきにりつぱなアーチが立たち、小しょうがくせい学がく生せいが、手てに、  
 手てに、はたをふりながら、見み送おくりにいくのだった。どこも、非ひじよ  
 常じょう時じで、緊きんちよう張ちようしているぞ。」



## 四

原つばのはしの方に、小さな森がありました。いろいろの木がしげっていて、風が吹くと、葉がきらきらと波のように、かがやきました。ひるすこしすぎる時分、「カチ、カチ。」という拍子木の音が、その方からきこえました。紙芝居のおじさんが、子供たちを呼んでいるのです。原つばで、ボールをなげているもの、とんぼを追いかけているものが、一人、二人と、その方へかけて行って、森の中へ集まりました。

森の中には、小さなお稲荷さまのほこらがたっています。そのほこらのとりの前は、あちらの町へつづく、ひろい道になって

いました。おじさんは、とりいのところへ自転車じてんしゃをおいて、みんなのくるのをまっています。光ちゃんみつとみ子こさんは、石いしのさくによりかかっています。信一しんも、勇二ゆうじも、ほかの子供こどもたちの中なかへまじって、ぼんやりと立たっていました。

ちようど、そこは、すずしい日ひかげになっあてて、頭あたまの上うへでは、せみがジイジイとななっています。やがて、「突撃兵とつげきへい」という、おじさんのお話はなしが、はじまりました。

「ある日ひ、召集しょうしゅう令れいが、忠一ちゅういちのもとへまいりました。彼かれは、手てに持もつ仕事道具しごとどうぐをなげすすててすぐたに立たちあがった。

『妹いもうとよ、あとをよろしくたのんだ。』

『お父さんとう、きようは、ご気分きぶんは、いかがですか？』

兄あにのいなくなつた後あとは、かよわい女おんなの身みながら、妹いもうとは、はたらいて、よく父親ちちおやの看護かんごをしていました。

『長い間ながあいだ、よくめんどろをみてくれたぞ。しかし、もう私もいくときがきたんだ。ただ生きているうちに、せがれのでがらをきかずに行くのが、ざんねんだ。』

『お父さんとうさん、そんな心こころぼせいことをおっしやつては、いけません。』

『いや、それよりかおまえは、お父さんとうさんがなくなつたら一人ひとりになつてしまう。おまえも日本にっぽんの女おんなだ。なんなりと、自分じぶんの力ちからでできることをして日本にっぽんのためにつくすんだぞ。』

『お父さんとうさん、よくわかりました。いま日本にっぽんの人は、男おとこでも女おんなで

も、年としよりでも子供こどもでも、一人ひとりのこらず、力ちからをあわせて、立たちあがらなければならぬときがきたんです。私わたしは、女おんなながら、つねにその覚悟かくごを持もっています。』

『ああ、それで安心あんしんした。』

これが、父親ちちおやのわかれのことばでした。

話はなしかわつて、こちらこちらは、戦場せんじょうであります。敵てきは、手てごわくわが軍ぐんの前ぜん進しんをさまたげている。忠一ちゆういちの部隊ぶたいは、クリークをへだてて、その敵てきと向むかいあっていました。

あすの夜明よあけに、敵てきのトーチカをくだいてしまえという命めい令れいがくだつた。忠一ちゆういちをはじめ一命めいを、天皇陛下てんのうへいか下にささげた勇士ゆうしたちは、故郷こきょうへ、これがさいごの手紙てがみを書かいてねむりにつきまし

た。

その夜中のこと、忠一一等兵は目をひらくと、国防婦人会の白い服をきた妹が立っている。おお、どうしてこんなところへきたかと、おどろいた。

『お兄さんに、知らせにまいりました。』

『なにつ、お父さんが、なくなられたか。それで、おわかれに、なんとおつしやられた？』

『はい。』と、妹がなみだぐみながら、

『せがれのでがらを、この世でできかずにいくのがさんねんだと、おつしやいました。』

忠一一等兵は、がばとはね起きました。同時に目がさめたの

であります。

『お父さん、ゆるしてください。じきに私もおそばへまいります

。』

おじさんが、ここまで話したときに善吉と武夫が、走つてきて、

「信ちゃん、吉川先生がきたから、早くおいでよ。」と、い

つて、ほころのうしろの方へかくれようとなりました。おどろいて、  
信一と勇二は、その後を追つたのです。紙芝居のおじさんは、  
何ごとがおこつたのかと、思つたのでしよう。

「どうしたのだ、どうしたのだ。」と、ききました。

「学校の先生が、きたんだよ。」

「なに、先生せんせいが。ちつともわるいことは、ないじゃないか。」  
と、おじさんはいばりました。

学校がっこうの先生せんせいが、七、八人にん、上級じょうきゅうの生徒せいとをつれて交通こうつう整理せいりの見学けんがくにとおつたのです。先生せんせいたちが、いつてしまうと、信一しんも勇二ゆうじも善吉ぜんきちも武夫たけおも顔かおを見せました。

「みんな、どうしたの？」と、おじさんがいきました。

「ぼくたち、いまどりの前まえで、べいをしているのを見つみかったんだよ。」

「なぜここへきて、話はなしをきかなかつたの？ そんなことをするか  
ら、先生せんせいが、こわいのだよ。」と、おじさんは笑わらいました。

「小山こやまくんが、先生せんせいに、ぼくたちのことをいいつけたんだ。だ

から、先生せんせいが、ぼくたちのそばまできて、のぞこうとしたんだ。  
」

「あした、学校がっこうへいくとしかられるよ。」と、善吉ぜんきちはしよげ  
てしまいました。

「小山こやまくん、ひきようだね。こないだのしかえしをしたんだ。」  
と、信一しんいちは、いいました。

「ほんとうに、ひきようだな。」

「おじさん、このお話はなし、後あとはどうなったの？」と、ほかの小さな  
子供こどもが、ききました。

「このあとのお話はなしは、またあす。これで、きようはおしまい。」  
子供こどもたちは、思いおも思いおもに、ちってしまいました。



「おじさんは、前まえにきた、紙芝居かみしばいのおじさんと、お友だちともだつてね。」と、信一しんがいました。

「ああ、友だちともさ、ぼくらは、みなが、いい人ひとになつて、日本にっぽんの国くにが、ますます強つよくなるようにと、紙芝居かみしばいをして歩あるいているんだ。」と、おじさんが答こたえました。

「じゃ、おじさんは、ほんとうのあめ屋やさんじゃないんだね。」と、善吉ぜんきちは、おじさんの顔かおを、ふしぎそうに見みました。

「あめも売うるから、ほんとうのあめ屋やさ。だつてお話はなしばかりでは、きいてくれないだろう。」

「ぼく、お話はなしだけでも、きくよ。」

「じゃ、あしたから、あめを持もつてくるのをよそうかな。」

「そして、お金かねをとらないの。」

「ほら、ごらん。みなは、お話しはなしより、あめのほうがいいのだ。」

「お話しはなしもきいて、あめも、もらいたいだよ。」

「ぼく、お話しはなしだけでもいいな。」

「だれだ、えらいぞ。は、は、は。」と、おじさんは笑わらいました。

## 五

翌日よくじつ、学校がっこうのかえりに、善吉ぜんきちと武夫たけおの二人ふたりは、吉川よしかわせん先生せいせいからのこされました。

「きつと、善ちゃんぜん、べいごまのことだよ。」と、武夫たけおがいいま

した。

「ああ、それにきまつているさ。だが、なんで、べいをしていけないんだろうね。」と、善吉ぜんきちは、まどの外そとのかききの木みを見上げみあていました。秋あきになってから、日ひの光ひかりが、夏なつよりもかえって強つよいようです。一つ、一つ、さすように葉はの上うえにかがやいていました。

「かきがなっているね、武たけちゃん、これはしぶいのだろう。」

「あまいのかもしれない。ここから、あの枝えだへは、うつれないかね。」

「とびつければ、とどくけど、落おちたらたいへんだ。」

二人ふたりは、二階かいのまどから、かききの木みを見みながらいろ考かんえつがづけていました。そして、早はやく家いえへかえって、あそびたいと思おもう

つたのです。それだけでなく、お母<sup>かあ</sup>さんや、お姉<sup>ねえ</sup>さんが、しんぱいしていられるだろうと思<sup>おも</sup>うと、こうしていることが、くるしかつたのです。

「先生<sup>せんせい</sup>、早<sup>はや</sup>くこないかな。」

「忘<sup>わす</sup>れたんだらう。かえらうか、武<sup>たけ</sup>ちゃん。」

このとき、ろうかを歩<sup>ある</sup>いてくる、くつ音<sup>おと</sup>がしたのでした。二人<sup>ふたり</sup>は、急<sup>きゆう</sup>におぎようぎをよくしていました。

先生<sup>せんせい</sup>は、教壇<sup>きょうだん</sup>のいすにこしを下<sup>お</sup>ろして、

「こつちへおいで。」と、善吉<sup>ぜんきち</sup>と武夫<sup>たけお</sup>の二人<sup>ふたり</sup>は前<sup>まえ</sup>へ呼<sup>よ</sup>ばれました。

「きのうは、家<sup>いえ</sup>へかえってから、なにをしてあそんでいたね。」

と、先生せんせいは二人ふたりの顔かおをごらんになりました。

善吉ぜんきちは、顔かおを上げあげて、

「まりをなげたり、べいをしていました。」と、すなおに答こたえま  
した。

「べいをしては、いけないというのでなかつたかな。」

善吉ぜんきちは、先生せんせいにそういわれると、だまつてうつむきました。

「君きみは、どう思うおもね。」と、先生せんせいは、こんどは武夫たけおに向むかつて、

おききになりました。

「よくないと思おもいます。」と、武夫たけおは答こたえました。

「わるいと思おもうものを、なぜやつたのだ。」

先生せんせいの顔かおは、しだいにおそろしくなりました。

「しまいに勝ったべいを、みんな返せばいいと思ひました。」と、善吉が、いいました。

先生は、しばらくだまつて、善吉のいうことをきいていられましたが、

「君たちは、わるいことをして、後でそれを返せばいいと思ひのかね。」と、おつしやいました。

「先生こまをまわすことは、わるいことですか。」と、武夫が、こんど先生の顔を見ながら、ふしぎそうにたずねたのです。先生は、ちよつと頭をかしげて、すぐには、返答をなさいませんでしたが、しばらくしてから、

「こまをまわすことを、いけないというのではない。勝つたり、

負<sup>ま</sup>けたりするのに、品物<sup>しなもの</sup>をかけてやることを、いけないというのだ。べいなら、その負<sup>ま</sup>けたこまを、勝<sup>か</sup>つたものが取<sup>と</sup>るといふうに、勝<sup>しょうぶ</sup>負<sup>あつ</sup>の後<sup>あと</sup>が、品物<sup>しなもの</sup>のやりとりになるからいけないといふのだ。」

「先<sup>せんせい</sup>生<sup>せい</sup>そんなら、ただ、おたがいがこまをまわして、勝<sup>しょうぶ</sup>負<sup>あつ</sup>をするぶんなら、いいのですか。」

「ものをかけたりしなければ、わるいことはない、みんなが、ただ一つぎりでな。ぼくも、子供<sup>こども</sup>の時分<sup>じぶん</sup>は、こまをまわすのが大<sup>だい</sup>すきだった。」

「先<sup>せんせい</sup>生<sup>せい</sup>も、べいをなさつたのですか？」と、二人<sup>ふたり</sup>の子供<sup>こども</sup>は、おどろいた顔<sup>かお</sup>をしました。

「いや、ぼくの子供の時分には、べいごまなどというようなものは見なかつた。もつと大形の木ごまか、鉄胴のはまつたこまだった。鉄胴のこまには、木ごまは、どうしてもかなわなかつたものだ。そして、こまの合戦は、それは、さかななものだった。」

吉川先生は、自分の子供の時分を思い出して、いまのものもものをかけずに、ただ勝負をただけで、それでもみんなが満足したという話をなさいました。

「木ごまは、鉄胴にかかると、よく真二つにわれたものだ。そのわれるのが、またゆかいだった。しかし、つばきの木でつくつた木ごまは、たいへんかたくて、なかなかわれぬばかりでなく、



うまく火花ひばなをちらして、ぶつかって、どぶの中なかへ鉄胴てつどうをはねとばしてしまふことが、あつたものだ。」

「先生せんせい、おもしろいですね。」

「おもしろいが、べいなんか、もうよしたまえ。このごろは、みんなでいっしょにたのしんで、そして、勝ち負けかまをきめるようなおもしろいあそびが、たくさんあるじゃないか。」と、先生せんせいは、おつしやいました。この時分じぶんには、先生せんせいのお顔かおは、いつものやさしいお顔かおになっていました。

「先生せんせいよくわかりました。」と、善吉ぜんきちが、いいました。

「わかったか。」

「わかりました。けれど先生せんせいにつげ口ぐちするものなんか、もっと

ひきようだと思ひます。」と、武夫が、いいました。

「つげ口ぐちされるようなことをしなければいいのだ。では、もうかえるがいい。」

吉川先生よしかわせんせいは、立ち上たがると、さつさと、ろうかの方ほうへ歩あるいていかれました。

「黒くろめがねの紙かみしばいのおじさんは、ぼく、この話はなしをしたら、辰たつちゃんぢんは、自分じぶんがけんかができないので、先生せんせいにいうなんてひきようだといったよ。」と、善吉ぜんきちがいいました。

「おじさんは、先生せんせいをよく知しっているといったね。」

「ああ、おじさんも、日本にっぽんの子供こどもは、そんなか、とくとかいうことなんか、考かんがえてはいけない。正ただしいことをしなければならぬ

といった。「

二人は、階段を下りて、話しながら校門の外へ出たのでありました。

「善ちゃん、あの犬をごらんよ。」

武夫のゆびさした方を見ると、白い色の犬が、まりをくわえて主人の後についていきました。ある家の門のところに、茶色の犬がはらばいになっていたが、この犬を見つけると、急におきあがって、ほえはじめました。二ひきの犬のあいだが、だんだん近づきました。しかし、まりをくわえた犬は、知らぬ顔をして、わき見もせず、主人についていくと、茶色の犬はいまにもとびつこうとしたのでありました。

## 六

赤<sup>あかつち</sup>土<sup>はら</sup>の原<sup>はら</sup>には、だれもあそんでいませんでした。茶<sup>ちやいろ</sup>色<sup>いぬ</sup>の犬<sup>いぬ</sup>をつれた男<sup>おとこ</sup>のひと<sup>ひと</sup>は、ボールを出<sup>だ</sup>すと、力<sup>ちから</sup>いっぱい、これを遠<sup>とお</sup>くへ向<sup>む</sup>かって投<sup>な</sup>げました。ボールは、青<sup>あお</sup>い空<sup>そら</sup>へ上<sup>あ</sup>がって、それから下<sup>した</sup>へ落<sup>お</sup>ちました。

「よし。」と、いうと、犬<sup>いぬ</sup>は、かけ出<sup>だ</sup>していききました。

「おじさん、犬<sup>いぬ</sup>の名<sup>な</sup>は、なんというの。」と、武<sup>たけお</sup>夫<sup>お</sup>が聞<sup>き</sup>きました。

「ジョンです。あれで、まじりけのないシエパードではありませんせんよ。」と、おじさんは、答<sup>こた</sup>えました。

「いい犬いぬですね。」と、善吉ぜんきちが、感心かんしんしました。ジヨンは、ボールをくわえてきました。

「訓練くんれんひとつですね、いい犬いぬにするには、なかなかほねがおれます。」

ジヨンは、ボールを主人しゆじんの前まえへおこうとすると、

「こら！」と、おじさんはしかって、手てに持もっているむちでジョンをたたこうとしました。ジヨンは、すぐ気きがついて、右みぎから左ひだりへぐるりと、おじさんの足あしもとをまわって、ボールをおきました。「よし。」と、おじさんは、犬いぬの頭あたまをなでてやりました。それから、おじさんは、犬いぬをそこに待またしておいて、自分じぶんだけ、あちらへかけていきました。やがて、おじさんの姿すがたは、草くさむらのしげつ

た中へ、かくれてしまいました。じつと、そつちを見ながら、すわっていたジョンは、主人の姿を見えなくなると、さびしくなつたのか、クン、クン、といて、おじさんをこいしがりました。善吉も、武夫も、忠実な犬が、かわいくなりました。

おじさんは、ちがった方角から、姿をあらわして、もどつてきました。

「よし。」と、命令すると、ジョンは、すぐに主人のいった足あとをさがして、ボールを取りにいきました。

「おじさん、まりをかくしてきたの？」

「土へうめてきたが、ちよつと見つからないでしょう。」と、いって、おじさんは、笑っていました。

いつまでたつても、ジョンは、かえつてきませんでした。見つからないのです。そのうちに、ジョンは、しおしおとして、なにもくわえずにもどつてきました。これを見ると、おじさんは、こわい顔をして、犬をにらみました。そして、手を上げて、

「だめ！」と、どなりました。ジョンは、また、さがしに、あちらへ走つていきました。

「かわいいそうだな、見つからないんだよ。」と、武夫は、犬に同情しました。

そのとき、少年が、きつきの白い犬をつれてさんぽにやってきました。そして、みんなのいるところへきました。

「ポインターのかわりですね。」と、おじさんは、白い犬の頭を

なでました。犬は、おとなしくしていました。おじさんは、よく犬の種類を知っています。また、どの犬もかわいがりしました。犬もまた、かわいがる人をよく知っていますようです。

ジョンは、やっとボールを見つけて、うれしそうに、くわえて走ってきました。おじさんも、喜んで、ジョンのそばへくるのを待って、犬が、ぐるりとまわって、前へボールをおくと、だくようにして頭をなでてやりました。

「おりこうですね。」と少年が、これを見て、いいました。「ふせ！」と、おじさんが、いうと、ジョンは、地の上へはらばいになりました。

「伏進！」



ジョンは、はらばいになりながら進すすみました。これを見みていた武たけお夫おは、善ぜん吉きちに向むかって、

「戦せん争そうにいつて、敵てきに見みつからないようにして、進すすむんだね。」  
と、ささやきました。

白しろい犬いぬも、おとなしくして、ジョンのするのを見みていました。  
すると、少しょう年ねんは、

「ごらんよ、おまえも、あんなことできるかい。」と、自じ分ぶんのほ  
おを、犬いぬの顔かおにおしつけました。おじさんは、見みて、笑わらっていま  
した。

「なにもおしえないのですか。」

「この犬いぬは、ぼうきれを投なげると、くわえてくるぐらいのもので

す。」

「その犬は、いぬ 獵りようけん 犬いぬ ですね。」

「だから、にわとりや、ねこを見ると、追おいかけて、しかたがないですよ。」と、少しょうねん 年は、いいました。そのうちに、少しょうねん 年は、犬いぬ をつれて、あちらへいつてしまいました。

おじさんも、一ひととおりの茶色ちやいろの犬いぬの訓練くんれんがすむと、善吉ぜんきちと武夫たけおに向むかって、

「さようなら。」と、いつて、ジヨンをつれて、お家うちへかえつていきました。

「ああ、きようは、かえりがおそくなつたね。ぼくお家うちへかえつて、きつと、おかあさんにしかられるだろう。」と、武夫たけおは、し

んばいしました。

「復習ふくしゅうがあつたと、いえばいいだろう。」

善吉ぜんきちは、うそをいって、わるいと思つたが、そういうことに、きめていました。

「ぼくは、原はらつぱで、犬いぬのおけいこを見てきたと、いおうかしら  
。」と、善吉ぜんきちが、いいました。

「残のこされたといわなけりや、どつちだつておんなじじやないか。」

日ひにまし涼すずしくなりました。原はらつぱに立たつて、だまつて空そらをみ  
あげながら、鳴なき声こゑのした方ほうに目めをそらすと、黒くろく小ちいさく、群むれ  
をなして、渡わたり鳥どりの飛とんでいくのが見みられました。

ワン、ワン、犬が、ほえています。その方を見ると、いつかおじさんのつれてきた、ジョンでした。

「ジョン、ジョン。」と、善吉が、呼びました。ジョンはかけてきました。そばには、武夫のほかに信一もいました。

「どこの犬なの？」

信一が、ききました。

「いつかどこかのおじさんがつれてきた犬だよ。」と、武夫は、あたりにおじさんがいないかと思まわしました。どうしたのか、おじさんの姿が見えません。

「ジョン、どうしたんだい？ ひとりかい。」と、善吉が、いうと、ジョンは、喜んでとびつきました。

「きつと、道をまぐれたんだよ。」

「ぼくたち、どつかへかくれよう、そうしたら、ジョンは、どうするだろうか。」と、武夫が、いいました。

## 七

「そうだ、いいことがわかった。」

「どんなこと。」

武夫と信一は、善吉の顔を見ました。

「ジョンが、まりをさがしている間に、僕たちはどこかへかくれるのだよ。そうしたらジョンは、どうするだろうかね。」と、善

んきち  
吉は、いいました。

「どうするだろう？ おもしろいな。」と、信一しんがいました。

「お家うちへ帰かえつていくかもしれないよ。」

「いや、きつと、僕ぼくたちをさがすだろう……。」

「よし、やってみようよ。」

武夫たけおはジョンにまりを見みせてから、自分じぶんは、向むこうのくさむら  
の方ほうへ走はしつていきました。そして、わからないように、草くさの中なかへ  
かくしてきました。

武夫たけおは、息いきを切きらしてもどると、

「ジョン、まりをさがしておいで。」と、すぐ命めい令れいをしました。  
ジョンは、かけていきました。

「さあ、この間あいだにかくれよう、どこがいいかな。」

先に立たつて、走はしつてゐる善吉ぜんきちが叫さけびました。

「僕ぼくの家の物置ものおきへいこうよ。」

三人にんは、原はらつぱを犬いぬのいつた、反はん対たいの方ほうに向むかつて走はしりました。

た。

広い道路どうろのあちらは、すぐ町まちになつてゐます。そして、いちば

ん近ちかいところに、善吉ぜんきちの家いえがありました。土管どかんや、じやりや、

セメントなどを、あきなつてゐました。物置ものおきの中なかには、これら

の品物しなものがつまれてゐました。三人にんは、きゆうくつそうに、体からだを

おしあつて、片かたすみにかくれて、かわるがわるふし穴あなから原はらつぱ

の方ほうをながめてゐました。

「どうしたんだろう、こないよ。」

「お家<sup>うち</sup>へかえったんじゃないか？」

とつぜん、のぞいていた信<sup>しん</sup>一が、

「きた、きた、ジョンが、きちがいのようになって、さがしているよ。」

「こつちへこない。」

「足<sup>あし</sup>あとをさがしているから。」

「まりは、どうした？」

「くわえている。」

「かわいそうだから、出<sup>で</sup>てやろうか。」と、善吉<sup>ぜんきち</sup>がいました。しかし、まもなくジョンは、小舎<sup>こや</sup>のところまでやってきました。



そして、まりを下へおいてさも悲しげに、鳴き出しました。

「ジョン。」と、このとき、三人は、先をあらそつて、物置からとび出しました。

「ふだに番地が書いてあるから、これからつれていってやろう。」と、信一は、ジョンの頭をなでました。

庭に、梅もどきの実が赤くなつて、その下に、さぎんかの咲いている家がありました。そこが、ジョンのお家でした。

三人は、げんかんに立つと、ジョンが尾をふつて、ワン、ワンと喜んで鳴きだしました。しようじ戸をあけて出てきた、おばさんは、犬と子供がいるので、見てびっくりしました。三人が、まよい子になった、ジョンをつれてきたことを話すと、

「まあ、まあ、それは、ありがとうございます。じつは、いなくなつたのでしんぱいして、みんなが、さがしに出でているのですよ。いつもつないでおくのですが、朝あさ、くさりをといてやったら、いなくなつてしまつたのです。」と、おばさんは、おれいをいいました。

武夫たけおは、ジョンをくさりにつないでから、

「さようなら。」と、いいました。

三人にんは、いいあわしたようにジョンの方ほうをふり向きむながら、門もんを出でようとすると、ジョンは、ついでいこうとして、くせりを鳴ならしてほえました。

「ぼっちゃん。待まっていてください。」と、おばさんが、あわて

て奥から出てきました。そして、げたをはいて、紙に包んだものをみんなのところへ持つてきました。

「これは、ほんのおだちんですよ。あめか、おかしでも買って、わけてください。」と、おばさんは、信一の手に渡そうとしました。

「いいえ、そんなものいりません。」と、信一は、手を引っこめました。

「そんなこというものでありません、さあ取ってください。」と、こんどおばさんは、善吉に渡そうとしました。

「おかしなんか買うとしかられます。」と、善吉も、手を引っこめました。

「じゃ、えんぴつを買ってわけてください。」と、おばさんは、むりに武夫の手ににぎらせました。武夫は、どうしたらいいかとおもったが、おばさんが、これほどいつてくれるのを、ことわるのはわるいと思つて、いただいて外へ出ました。

「困つたなあ、これどうしたらいいだろう。」と、武夫は二人にそうだんしました。

「じゃ、えんぴつを買ってわけようよ。」と信一が、答えました。「武ちゃん、君、あずかっておいでよ。」と、善吉がいつて、三人は、原っぱへもどつてきました。もう西の方の空が、赤くなりかけていました。

「あつ、紙しばいのおじさんがきている。」

三人は、子供たちの集まっている方へかけ出しました。そこには、小山も、かね子も、光子も、とみ子もきていました。

「ね、黒めがねのおじさんが、支那へいくんだって。」と、三人の顔を見ると、小山はいいました。

「ほんとう？ 黒めがねのおじさんが、支那へいくの。」と、武夫が、おじさんにききました。

「ほんとうだとも、こんど宣撫班になって支那へいくのだ。」と、紙しばいのおじさんは、答えました。黒めがねのおじさんは、いつかこの原で、樺太へ旅行をしたときの話をしてくれました。

「宣撫班って、支那人のせわをしてあげるの。」と、とみ子さ

んがたずねました。

「ああ、そうだ。そして、支那の子供におもしろいお話をきかせてやるのさ。どんなに喜ぶだろうな。」

「どんなお話？」

「そのお話が、あのおじさんのことだから、日本の子供のことさ。きつと君たちのお話をして、日本の子供は、みんなしようじきで、やさしくて、いい子ばかりだということだろう。」と、

おじさんは、笑いました。

「そうかなあ、僕たち、あのおじさんに、旗を送ろうか。」

「そうだ。ジョンのお家からもらったお金で、旗を買おう。」

「僕も、お金を出すよ。」と、小山が、いいました。赤土の原

つばには、  
赤々<sup>あかあか</sup>として、  
夕日<sup>ゆうひ</sup>がうつつていました。





## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「せうがく三年生」

1939（昭和14）年6～12月

※表題は底本では、「赤土《あかつち》へくる子供《こども》たち」となっています。

※初出時の表題は「赤土へ来る子供たち」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 赤土へくる子供たち

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>